

鹿児島大学 理学部通信

2011年
第5号

理学部通信第五号発行に寄せて

同窓会会長 川畑 隆

同窓会会員の皆様方には、益々御健勝で御活躍のことと心からお慶び申し上げます。

世界的経済不況の中、ブリックスの発展ぶりは目を見張ると同時に、他方、地球規模で変わりつつある環境の悪化は、人類の飽くなき欲望や主義思想の独善的な方向へと進化？否、退化とも言えるその結果ではないでしょうか。また、連日マスクミを賑わしていた阿久根市の行政改革による、市民を二分する不法な専決革命とやらもまた、この独善的思想の突出した一部の現れではなかったかとさえ思われます。この阿久根市問題は、ひとつの試練として、考えを新たに同窓会の会員の多くの方々と、更に世界の人類の幸せの方向を見いだしたいと思えます。然るに我が理学部同窓会は、母校創立六十周年記念の学長訓示の中に、「進取の気風あふれる大学」であり、「自主・自律」を目指すことと謳われたことを思い出し、今更ながら地域のリーダーとしての我々が共通して抱える諸問題の解決に邁進したいものだと思致しました。

理学部通信は関係者のご理解とご協力により順調に回を重ね好評を頂いております。平成二十二年九月十二日には鹿児島大学理学部同窓会第一回総会が東京都品

川区の三州クラブで盛大に行われ、五十名出席のもと、我が理学部長清原貞夫様より祝辞と激励の言葉を賜り、御来賓として鹿大同窓会連合会関東支部長今村彬様の御臨席と御挨拶を頂き、会に花を添えて頂きました。これもひとえに関東支部会長満田泰啓氏を中心に、顧問若松隆二氏・水本和智氏たちの心暖かいご協力の賜と深く謝意を表するものです。

そこで皆様方には、三月に新幹線開通により、より鹿児島が近くなるので是非足を運んで頂き、母校の（本部）同窓会にも御出席下さる様お願いしたいところです。また、理学部（本部）同窓会総会は、平成二十二年十一月十二日午後六時よりジェイドガーデンパレスにて出席者二十五名のもと行われました。

総会議事の様子を御紹介します。次の通りです。
（一）会則変更について―同窓会幹事の富山清升氏の説明（二）執行体制について―会長・副会長の選出の手續きについて、及び、事務局世話人と会計係の変更と新体制について。入れ替わりの多い同窓会理事・幹事の人事確認について（三）会計報告―濱田季之氏より決算資料説明、富山清升氏より会計監査報告、予算資料説明―富安卓滋氏（富山清升氏代理説明）

（四）幹事会報告―内海俊樹氏より資料説明（五）幹事会からの予算の使途の提案についての承認（六）その他、提案・意見。協議終了後、懇親会開催。会長挨拶に続き、理学部長・清原貞夫先生より祝辞を頂く。同窓会幹事・蔵脇淳一氏が司会を担当し、

（一）乾杯・参加者中最も若い人（二）余興その一…パワーポイントによる最近の理学部紹介（富山清升氏他）、余興その二…参加者の近況報告・自己紹介など（三）閉会の挨拶（副会長大木彦氏）（四）「北辰斜に」斉唱（五）万歳三唱 東四郎氏
と会が進められ、大変楽しいひとときを過ごしました。

以上の通り、理学部同窓会（本部）が益々充実するために、さらに多くの会員出席ができるよういろいろな方策を検討し、理事・幹事様方のお知恵をお借りしながら、次の同窓会幹事会にご期待申し上げ、新体制による総会への出席のご協力を呼びかけて頂きたいものです。

最後になりましたが、本通信の発行にご尽力頂いた理学部通信編集委員会の先生方、各学年選出の学生の編集委員の皆様には、大変ご苦労様でしたと心よりお礼申し上げます。上げて会長の挨拶とさせて頂きま

理学部通信第5号 目次

同窓会会長挨拶 川畑 隆…………… 1	研究科を中心にスタート…………… 3
理学部はいま 宮嶋公夫・清原貞夫…… 2	数理情報科学科…………… 4
理学部ニュース…………… 2	物理科学科…………… 5
水蒸気観測小型衛星「ハヤト」の 打ち上げに携わって…………… 2	生命化学科…………… 5
「実践的コア・サイエンス・ティー チャー（CST）養成スクール」が理工学	地球環境科学科…………… 6
	卒業生だより…………… 6
	人事異動・学生表彰者…………… 8

理学部はいま

理学部長 宮嶋 公夫



四月から理学部長を務めます宮嶋です。近年、益々求められている科学の基礎に裏打ちされた人材の育成を担う学部で、また、旧制七高造士館以来の伝統を持つ学部の学部長として、責任の重さに身が引き締まる思いでおります。専門は数学で、複素数に基づく解析学と幾何学に関する研究を行っています。

発足から四十六年。既に六千名を超える卒業生の皆様が社会の各方面で活躍中ですが、近年の科学技術の急速な発展・普及は、将来の変化に柔軟に対応できる基礎力を備えた人材を社会の各方面に求めていることはご承知の通りだと思います。また、ブラックボックス化した高度科学技術と市民社会との架け橋となる科学の基礎を理解した人材の重要性は、小中高の教育現場だけでなく市民社会の

各方面で益々大きくなっていきます。このような期待に応えるべく、理学部では、国際研究ネットワークの一翼を担った第一線での基礎研究や情報・宇宙・地震火山・分子生命・環境などの学際分野での研究に裏打ちされた教授陣が学生へ理学の魅力を伝えるために日夜奮闘しています。私も微力ながらその先頭に立って、学生が誇りに思える理学部をつくるために全力を尽くす所存です。

同窓会の皆様の変わらぬご支援・ご協力をお願い申し上げます。

前理学部長 清原 貞夫



二〇一一年度を迎え、全国各地の鹿児島大学理学部同窓生の皆様、ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。理学部通信五号の発行に当たり、ご挨拶と理学

部の近況を報告させていただきます。

二〇一〇年度の特筆すべきことは、第六十一回鹿児島大学開学記念日（十一月十五日）に『鹿児島大学学生憲章』が制定された事があります。明治維新から受け継がれる「進取の精神」を掲げ、鹿児島大学の学生としての理想や規範が述べられています。既に定められていた『鹿児島大学憲章』と併せて今後の大学の目指す指針が力強く謳われています (<http://www.kagoshima-u.ac.jp/about/rakuseikensyoh.html>)。

研究における大きなニュースは、理学部（西尾教授と指導学生）と鹿児島県内企業の技術者等で構成する鹿児島人工衛星開発部会が開発し製作した「鹿児島衛星（K S A T）」が、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の金星探査機「あかつき」に搭載されて種子島宇宙センターから打ち上げられたことです。この衛星は、集中豪雨・竜巻・雷雨などの早期予報の研究に利用されます。打ち上げ当日の五月二十一日、早朝六時三十分より理学部内でパブリックビューイング（一般公開）が行われました。吉田学長をはじめ教官、一般市民、附属小学校児童らに加え、新聞・テレビ等マスコミも一緒になって、息をのみながら種子島宇宙センターから送られて来る打ち上げの映像を見守りまし

た。K S A Tはロケット離陸から十数分後に高度約三百kmで第二段ロケットから切り離され、地球周回軌道に投入されました。その後しばらく所在不明になりましたが、六月一日には交信に成功し、多くの貴重なデータが得られました。この取り組みは、一般市民や子供たちに多くの夢を与え、理学部の宇宙科学と産業への貢献をアピールすることができました。

今年度も理学部の更なる発展のために教職員一丸となり、理学部学生を羽ばたかせ、また研究を開かせるよう努力していく所存であります。最後に同窓会の皆様へのご健勝をお祈りすると共に、さらなるご支援ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

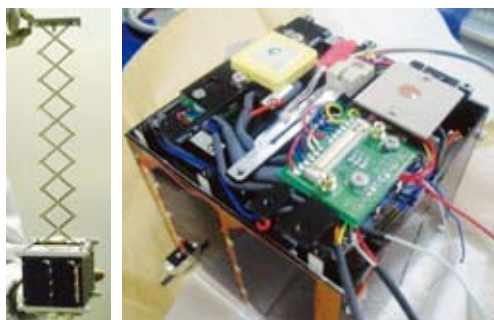
理学部 ニュース

水蒸気観測小型衛星「ハヤト」の打ち上げに携わって

二〇一〇年五月二十一日午前六時五十八分二十二秒、小型人工衛星K S A Tが金星探査衛星「あかつき」の相乗り衛星としてH2A-17号機により打ち上げられま

した。打ち上げ後、K S A Tは地球上空三百kmをおよそ九十分の周期で周回する軌道に入りました。打ち上げ成功に際して、K S A Tには、「ハヤト」という愛称が付けられました。この衛星は（1）大気水蒸気の観測を行い、集中豪雨や竜巻の予測を目指した研究を行うこと、（2）衛星に搭載した小型カメラで撮影した画像を電波に乗せて地上へ送信し、地球の動画撮影を行うことの二つを主な目的として、鹿児島大学理学部と地元企業（鹿児島衛星開発部会）が協力し、民生部品を用いて製造した一辺十cmの立方体、重さ一・四kgの非常に小さな衛星です。宇宙空間では長さ六十cmのブームが伸びて、写真1のような形で飛行します。

私たちは五月十八日、当初予定されていた打ち上げ日、鹿児島衛星開発部会の方々と一緒に研究室メン



(写真1) 衛星の軌道上での姿とその内部



(写真4) 管制室での運用



(写真3) 打ち上げ当日の公開見学会



(写真2) 衛星(左下のサイコロ状のもの)分離の瞬間(宇宙航空開発研究機構(JAXA))

バーで種子島宇宙センターでの打ち上げの見学に参加していました。前日まで晴れていた空は打ち上げ直前十分前に急に厚い雲に覆われ、天候悪化が原因で打ち上げ延期となりました。中止の決定が直前であった分、延期への落胆は大きかったのですが、無理をせず無事に打ち上げることが一番だと思っておし、二十一日の打ち上げを待ちました。そして五月二十一日の早朝、H2A-17号機は無事に打ち上がったのでした。打ち上げ後すぐに、衛星はロケットから切り離され、狙った周回軌道へと投入されます(写真2)。打ち上げ時には鹿児島大学でパブリックビューイングも行われ、多くの一般市民の方も衛星の打ち上げを見守りました。写真3がその時の様子です。衛星の名前「ハヤト」はこの場で発表されました。

さて、打ち上げ成功のあとは喜びにひたる時間もそこそこに、あわただしく衛星の運用が始まります。西尾教授と民間企業の方と学生で構成される運用担当者は理学部の屋上に設置されたアンテナでハヤトの産声を聞くため、理学部一号館三階に特別に設けられた管制室(写真4)で準備に入ります。運用では、衛星が鹿児島から観測できる時間を計算しアンテナの駆動時間を設定します。そして、データ記録の準備、衛星への指令を準備し、衛星が鹿児島の上空に来る

タイミングで衛星からの電波を確認し、様々な指令を衛星に送ることで衛星を動作させます。打ち上げ直後の観測で、ハヤトからの信号を受信したと思われましたが、その後の解析で受信確定とは断定できないことが分かりました。その後もハヤトからの信号を確認することが出来ないうちに時間が過ぎていきました。この期間の運用は夜も明けきれない早朝に行われ、運用が終了するとすぐに観測装置の点検と次の観測の準備に追われ、寝る間もないほどのハードスケジュールでした。理学部棟の屋上に設置されたアンテナ(写真5)の受信感度を上げるため、受信機の交換を雨の中でビニールシートを傘にしながら行ったこともありました。そして、アンテナの変更、追跡ソフトウェアの改良、軌道予測方法の変更など様々な工夫をし、六月一日に信号を受信することに成功しました。それまで受信できなかった原因としては、大気による空気抵抗で軌道の予測がずれていたことが考えられています。この後六日間ほどの連続的な信号受信が確認されましたが、八日に再び受信が確認出来なくなり、七月十四日の大気圏への突入を以ってハヤトの運用は終了となりました。

六月一日の受信が確認された時、立ち会ったメンバーによると初めは打ち上げ当日のように実際

に受信できたのか半信半疑だったそうです。しかし、続く受信信号の反応に、偶然訪れていたKYT鹿児島読売テレビ、MBC南日本放送、南日本新聞の方々と共に管制室は大騒ぎとなり、受信確認を喜んだそうです。私はその場にいなかった為にハヤトの産声を聴くことは出来ませんでした。翌日の運用でハヤトからの信号を確認したときは、今までの時間が無駄じゃなかったのだと、非常に嬉しかったことを覚えています。

今回の衛星ではすべてのミッションを達成することは出来ませんでした。宇宙での動作が確認されたことは十分な成果であったと思います。最後に二〇〇五年度から続いてきた衛星開発で、多くの先輩方が卒業する中、打ち上げ運用に携われたことを光栄に思います。今回の衛星開発に関わった全ての皆様に感謝しつつ、次期衛星開発を目指して再び走りだして

「実践的コア・サイエンス・ティチャー(CST)養成スクール」が理工学研究科を中心にスタート

近年、科学教育の危機が言われる中、小中学生の「理科離れ」や「理科嫌い」が指摘されています。その一つの要因として、理数教育

力・指導力の低下が挙げられています。そこで、児童生徒に「科学する楽しさ」を伝えることができ、小中学校の理数系教員の養成を目指した「理数系教員養成拠点構築事業」が独立行政法人科学技術振興機構(JST)により平成二十一年度に新規公募がありました。鹿児島大学では、教員養成の分野では素人同然の理工学研究科を中心に、農学研究科、水産学研究所、教育学研究科、鹿児島県教育委員会、鹿児島県総合教育セン



(写真5) 理学部屋上のアンテナ

いきたいと思います。
(大学院理工学研究科
物理・宇宙専攻 二年 原田勇治)

ター及び鹿児島市教育委員会が協働した「実践的コア・サイエンス・ティーチャー(CST)養成スクールと活動拠点構築プロジェクト」(平成二十一〜二十四年度)を策定し、応募しました。鹿児島大学の提案は、第一次選考で採択された五大学のひとつとして採択され、準備並びに模擬試行を経て、平成二十二年四月から本格的にCST養成が開始されています。

本事業のCST養成スクールでは、教員を目指す大学院生と中小学校の現職教員を受講対象者としており、平成二十二年度は各研究科に在籍する八名の大学院生が受講しています。平成二十三年度からは、新たな大学院受講生の他、小中学校の現職教員五名の受講を予定し、理工系研究科の特性を生かした教育プログラムを提供していきます。そのカリキュラムの特徴は、以下の二点です。

①理科教育における指導法の知識・技能を中心とする教員養成は困難なので、「科学する眼」を持つ理科教員を養成することを目的とする。そのため、教員志望の大学院生を受講生とし、修士論文とCSTプログラムの両方を通して、「科学する眼」を養う。

②現職教員の受講については、再教育や学校教育現場の「理科を教える」ノウハウを提供するのではなく、大学院生を受講生と同様に、新たな知識と科学的思考の充足を図



り、学校教育現場で曇りがちな「科学する眼」をリフレッシュするとともに、自らの教育実践の高揚を図り、地域の理数教育において核心的な役割を担い、小・中学校での理数教育における指導力向上を目指す。

CST養成スクールの教育プログラムは共通(必修)授業群と選択授業群から構成されています。たとえば、「共通授業群」の一つである「実践理科実験室」では、理学部を中心とした三十五名の教員が授業担当者として参加し、小中学校の理科で行う学習内容を精査・分類し、物理、化学、生物、地学の各分野合わせて六十時間の講義及び実験・実習を通して、実験・観察に必要な理論と技能を学ぶことを目的としています。

平成二十年度から理学部で実施されている学部生を対象にした教育プロジェクト「インテンシブ理数教育特別プログラム推進事業」とともに、理学部では、教職員一丸となって、新たな教育を押し進めています。本プログラムの詳細については、理学部ホームページの「特徴ある教育」に示されていますので、是非ご覧ください。

数理情報科学科

合宿研修

十月二十八日(木)から二十九日(金)の期間に霧島で行われた二年生対象の合宿研修に参加しましたので、研修の様子などをお知らせします。

研修は、リーマン予想のビデオ(NHKスペシャル・魔性の難問)リーマン予想・天才たちの闘い)を鑑賞することから始まり

ました。ビデオ鑑賞後、数人のグループに分かれて素数に関連する問題を解きました。これまであま

理学部祭

私達、数理情報科学科は数学を身近に感じてもらうために、「数理解deサブリ」と題して、パズルやなどなどを理学部二号館214号教室で提供しました。

1. ポリドロンというブロックを利用した立体作り
2. マッチ棒を動かして数式を成り立たせるパズル
3. いろいろな図形を組み合わせて決められた図形を作るパズル
4. 紙の切り貼りによる立体作り
5. ひっかけなど
6. トランプを使ったマジック

が、澄んだ空気の中で体を動かすことができ、良い気分転換になりました。

この二日間を通して、数理情報科学科二年生の親睦を一層深めることができました。合宿研修は、大学生活の良い思い出の一つになりました。

(数理情報科学科二年 高山紘志)



の六つのコーナーを準備しました。小学生を中心に、中学生や大学生、小学生の保護者の方々にご来場頂き、とても賑わいました。その中でも1のコーナーが一番人気でした。私たちがびっくりするようなものを作り上げていく子どもたちがいて、私たちの方が楽しませてもらったような気がします。全てのコーナーで、保護者の方も子供達と一緒に、頭を抱えつつ取り組んで下さいました。また6のコーナーは、伊藤稔先生直伝のマジックで、実際に子どもたちにもマジックのタネを作ってもらいました。マジックが成功すると子どもたちは大喜びしていました。



サポートにつき、難しい問題で悩んでいる子どもたちにはヒントを出してあげたりしました。解らなかつた問題が解けた時の、子どもたちの喜ぶ姿がとても印象的でした。(数理情報科学科四年 池島美奈子)

物理科学科

☆毎年恒例☆

夏休み理科実験

「夏休み理科実験！」と銘うち、鹿児島大学理学部物理科三年生を中心に、鹿児島県の複数の大学や専門学校からの多くの学生との協力による、小中学生を対象とした出前理科実験が行われました。

これは鹿児島大学理学部物理科学科三年生の講義「公開講座実習」の一環として行われたものです。座学が多い普段の講義の中にあつて、フィールドワークを伴った特色ある講義の一つとして注目されています。学生達は理科実験の立案から、各大学・協力機関への連絡などを自ら行い、試行錯誤を繰り返しながらおよそ二カ月かけて本番に備えます。

例年であれば鹿児島大学農学部入来牧場に隣接する国立天文台V E R A入来観測局をメイン会場として行われるのですが、今年はお口蹄疫の影響で開催が心配されるなど、例年になく問題が多い年となりました。長い時間をかけて理科実験の準備をしてきた受講生の熱意を無駄にたくないとの思いで、周囲の先生方のサポートなどにより、薩摩川内市の平

佐西小学校体育館へと場所を変えて行われる事になりました。

二〇一〇年八月七日(土)、出前理科実験の当日をわれわれ学生は「果たしてお客さんは来てくれるのか？」と緊張の面持ちでむかえました。しかしそんな心配も必要なかったようで、今年も会場は子供連れの家族で大賑わい、大盛況となりました。学生達も、実験デモンストレーションや口頭での説明などで普段の練習の成果を試そうと、子供達への説明に一生懸命でした。この活動を通していろんな世代の人たちに理科について分かってもらう事の難しさを感じ、学生一人一人にとっても非常に意義あるイベントとなりました。現在、はやくも来年のイベントへ向けた引継ぎ作業が行われており、学生にとっては、大人数のイベント運営という面でも、実践を通して苦労しながら学ぶ場となっています。来年も、どうぞ期待です！

(物理・宇宙専攻二年 坂井伸行)



理科実験当日の様子

生命化学科

研究室紹介 (坂井研究室)

私たちの研究室では、主にアフリカツメガエルの体軸形成機序について研究しています。配属学生は、研究はもちろんのこと、まず「科学とはどういうものか？」ということを学んでいます。世の中は宗教的な考え方(目的論)で成り立っており、多くの人は無意識

に様々な事象に意味や目的を見出そうとしてしまいます。例えば、人は万物の霊長だという意識を皆さん持っていませんか？それは間違いです。ヒトは生物の一種です。現在の生物学の教科書、専門書や論文には、目的論によって「事実」が方向付けられているものが多く見られます。私たちは、時には教科書に書いてあることさえも本当なのか？と疑問に思ったり、事実のみから考察し科学すること

理学部祭

大学祭の期間中、理学部祭(二〇一〇年十一月十三・十四日)が行われました。今年の生命化学科のメインタイトルは、「化学への招待」。それをテーマとして行われた内容は「光る！香る！スライム作り」、「アロマキャンドルと香水を作ってみよう！」、「消えるインク」、「浮き出る指紋」、「葉脈標本をつくらう!!」。五つのブースに分かれて四年生や院生らが楽しい科学とのふれあいを演出していました。

例年以上の寒さにかかわらず、祭りは小学生やその親御さん達などで賑わいを見せていました(二



日間の推定入場者数は約八百人)。また、参加した子供たちは、楽しみながらも真剣なまなざしで実験を行っていました。



子供たちが今年の「招待」をきっかけに将来生命化学科へ入学するようなことがあればいいなと感じた理学部祭でした。(生命化学科四年 北村龍彦)

脱・目的論



を日々訓練しています。(生命環境科学専攻二年 本村恵理子)

地球環境科学科

環境解析講座 市川研究室



有明海の海洋調査

私たちの研究室では、海洋の物質循環の研究をしています。具体的には、海中の粒子状有機物（マリンスノー）の分布、季節変化、鉛直輸送、植物の生産をコントロールする栄養塩の分布や変動を調べています。海の研究ですので船に乗って試料を集めます。以前は四年生も大学の船で東シナ海や熱帯太平洋、さらに赤道を超えて南太平洋まで何十日も航海に出ているのですが、最近では鹿児島湾や有明海など近くの海を調べています。海の研究は天候に支配されやすく、なかなか思うようにはいきません。また、水の世界で

仲谷研究室では、鹿児島県のほか、北海道、ケニア、エチオピア、イラン、モンゴル、タイ、アメリカなど、国内外の地質やそこから産出した脊椎動物化石などを研究対象として、古生物の進化や生物地理、地球環境変動の解明を目的とした研究を行っています。古脊椎動物化石を扱う学生は、その基礎となる骨学や解剖学、分類学を学んだ上で、各自テーマを決め研究を進めていきます。地質を研究

地質科学講座 仲谷研究室

すから自分の都合のいいときに行きたい場所に出かけることもできず、チャンスと天気まかせの非能率的なものです。海水やプランクトンの採集には、特別の技術と設備があるので、船の職員や他の研究者とのチームワークが重要になります。海の中は私たちの目に見えないので気がつかないのですが、科学的な方法で調べてみると、海もまた陸上と同様に四季の変化があることがわかり、とても興味深く思いました。
(地球環境科学科四年 高藤幸乃)

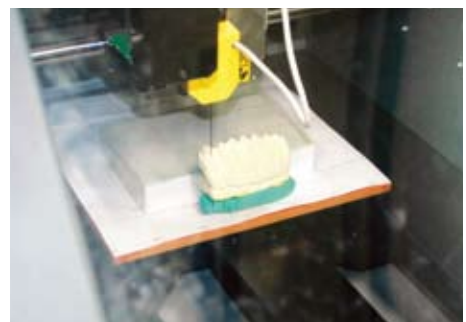
する学生は九州の中生代〜新生代の地層を対象に、基本的な野外調査、化石の採集・観察などを行い研究していきます。
仲谷研究室大学院修士課程一年生の大出悟さんにインタビューしました。「現在、更新世のエチオピア産ウマ科化石の臼歯を用いた古環境復元を目的とする研究を行っています。今年の夏にはエチオピアの博物館で標本調査を行い、多くのデータを収集することができました。それらをもとに、高知大学で開催される古生物学会で、そ

卒業生だより

永野 哲也さん
理学研究科数学専攻
昭和六十二年度修了
長崎県立大学



本務校から研修許可をもらい、研究科修了から二十二年を経て再び鹿児島大学でお世話になっていきます。現在の校舎は最近建て替えられてとてもきれいで明るいです。まるで昔の学生だった自分が未来に来ている錯覚を覚えます。



イノシシの臼歯化石(レプリカ)の三次元データの計測

の成果を発表する予定です。」
(生命環境科学専攻二年 中谷大輔)

大学を出て次の年にバブル経済がはじけてこの二十二年間は世界的には下降の一途でした。デフレ経済にあえぎ無縁社会とかワーキングプアとか新卒者の就職率が低いとか、果ては、出生率低下、高齢化、親の児童虐待、親殺し・子殺しなど、日本は外敵に侵略される前に自滅するのではないかと思われる状況が数多く指摘されています。私みたいな者が憂えても仕方ないことで、時代や社会の流れには抗し難いという思いも沸いてきます。しかし一方、スポーツ界では大リーグの Ichiro、ゴルフの石川遼などのように若く有望・優秀な人々もどんどん出てきて皆を元氣付けてくれています。



並河 大地さん
理工学研究科物理・宇宙専攻
平成二十一年度修了
日本電信電話株式会社
NTPサービスインテグレーション基盤研究所

学術の世界でもここ数年日本人がノーベル賞を授与されています。この間、私自身は結婚し、子を生し、職を三度替え現在に至っています。今年(日22)はなぜか旧友との再会が多く、校長・教頭先生に成られている方、あるいは企業の社長を含む幹部や独立して事業をされている方とそれぞれの方の健闘振りを伺うことができる年でした。
論文を書く身になって久しく、学生の頃よりは数学への理解が進んだことは事実ですが、まだまだ自分で満足できる成果をあげられません。いい歳になつていのですが、まだ研究を捨て切れませんが、お世話になっているこの半年の間に自分の数学を掴みたいと思つていきます。と言つてもこの文章が出る頃には、私は既に鹿児島にはいないのですが、はたして思いは叶つていくでしょうか？

昨今の「はやぶさ」の成功や「あかつき」の軌道投入など、宇宙開発の話題を聞くたびに鹿児島大学理学部の事を思い出します。私は中学生のある日「未踏の地を探検したい↓宇宙に行きたい↓宇宙飛行士は探検するような職業ではない↓だったらせめて宇宙の謎を解き明かしたい↓天文学を学びたい」という単純思考により天文学を志しました。そして鹿児島大学理学部宇宙コースの門を叩き、天文学の基礎に始まり、望遠鏡での観測、ブラックホールの研究、観測装置の開発等を学びました。その過程は天文学自体の困難さや、教官との意見の相違、天文学で生計をたてていくことの困難さ等、楽しいことばかりではありませんでしたが、研究の面白さを実感し、一生付き合っていきたい仲間を得ることできました。そしてなにより天文学を思う存分学ぶことができました。

現在はN-T-T研究所にて新サービスの創造とそのため必要となる技術の研究を行っています。理学部で学んだ天文学が直接役にたつことはありませんが、研究の進め方や、成果の伝え方等、理学部で培ったことが役に立つことが多々あります。また宇宙の話題で上司と盛り上がることもよくあります(笑)。

このように鹿児島大学での六年間は私にとっても有意義なものでした。そして、いつの日か宇宙開発に携わる仕事をし、再び鹿児島大学理学部を訪れたいと思います。そう「はやぶさ」のように

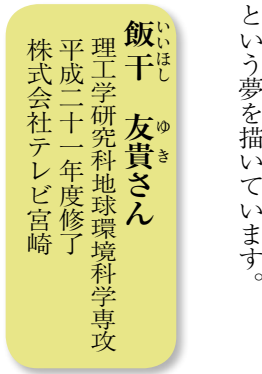
清水 秀樹さん
しみず ひでき
 理工学研究科生命化学専攻
 平成二十二年修了
 塩野義製薬株式会社 主任研究員



私が鹿児島大学の理工学研究科生命化学専攻を修了したのは約十年前で、その後、九州大学に進学し博士号(理学)を取得しました。学部時代から希望していた製薬会社就職することができ、これまでに六年半、プロセス化学に従事する研究員としてその責務を果たして参りました。そして今は、澄み渡る青空の下、カリフォルニア工科大学でポスドクとして留学生生活を送っています。

的に海外へ事業展開しており、弊社もその企業の一つです。異国文化を理解し、自社のグローバル化に貢献することを目的としたグローバル人材育成の一環として、今回幸運にも海外留学することができました。学生時代に戻ったかのように専門研究に没頭できることに喜びを感じています。

飯干 友貴さん
いひほし ゆき
 理工学研究科地球環境科学専攻
 平成二十一年修了
 株式会社テレビ宮崎



私(飯干)には世界各国から優秀な研究者が集まって来ます。米国の著名大学を始めとし、欧州からはドイツ、デンマーク、アジアからは日本よりも韓国、中国から進学してくる大学院生が多く、様々な文化について情報共有することができ、今でも苦労が耐えない毎日ですが、拙い表現でも積極的にコミュニケーションを取るよう心掛けています。しかしながら学生時代に英語の勉強を怠っていた自分(飯干)に後悔と反省の念は強く、今勉学に励む学生には英会話力を鍛える学習をできるだけ若いうちに積み重ねて欲しいと思います。

渡米直前に、現役の理学部の学生さんへ向けて講演する機会をいただきました。「自分の将来を切り拓くために」という演題で、企業研究員として働く先輩から現役の学生へ経験談を交えたメッセージを送りました。ちょうど就職活動の時期も近く、講義室は立ち見が出るほど盛況で、研究者になり

たい、化学に従事する職に就きたいと考えている学生の熱い視線を感じられたのは大変嬉しく思いました。就職氷河期の続く厳しい現実には負けないように、薩摩魂を持った若人が世界に羽ばたいていくことを切に願っています。私もまだまだ若いつもりで、乾いたスポンジのようにたくさんの知識を吸収して、実力向上を目指します。そして将来は鹿児島に貢献したいという夢を描いています。

私の長所がきつと活かされると思いい、今の会社を志望しました。現在、報道部に配属され主にニュースの字幕スーパーを作っています。毎日が緊張とプレッシャーの連続ですが、オンエア後は何とも言えない充実感を味わう事ができ、仕事は凄く楽しいです。

Q2. 学生時代どんな研究をしていたのですか?また現在の仕事に役に立っていることは何ですか?
 A. 大学院では、古生物学を専攻してました。マスコミで、私の研究や勉強してきた事がそのまま活かされる機会はなかなか無いのですが、研究する上では、多くの論文を読み、あらゆる情報を収集して考えていくことが必要でした。仕事をする上でも、前もって情報を集めておく事はとても大切です。何の知識も無い話題の字幕スーパーを作るよりも、知識のある話題のスーパーを作る方が言葉の間違いも防げますし、ニュースは生番組でスピードが必要なので、そういった中で早く作る事が出来ます。

Q3. 理学部の先輩にメッセージをお願いします。
 A. 就職活動で最も重要なことは、好感を与える態度能力を身につける事だと思えます。ま

た、これは社会人においても必須能力です。自分から挨拶をする、明るく返事をする、いつも笑顔で、これがしっかり出来る人は、良い人間関係を築いて行くことが出来ると思います。人と繋がれば、その分良い仕事ができ、仕事の幅も広がります。

私も後輩の皆さんに負けないよう、婉婉聴従を心がけ、これまで以上に頑張りたいと思います！就職氷河期で、学生の皆さんは本当に大変だと思いますが、自分を信じて頑張ってください。応援しています！

人事異動

(平成二十二年度)

新任教員

- 数理情報科学科
数理構造講座
中岡 宏行 准教授
- 物理科学科
宇宙情報講座
半田 利弘 教授
- 生命化学科
有機生化学講座
伊東 祐二 教授

学生表彰者

(平成二十二年度)

稲盛賞受賞者

山内 到 (数理情報科学科)
西澤 文勝 (地球環境科学科)

稲盛賞は、平成十五年度から京セラの名誉会長稲盛和夫氏の寄付金により運営されています。

理学部賞受賞者

田中亜矢子 (物理科学科)
石田 拓也 (生命化学科)

理学部賞は、平成十九年度から理学部教員の寄付金を基に、優秀な成績を収めた学生やボランティア活動など顕著な社会貢献を果たした学生に、理学部と同窓会が合同で表彰する制度として制定されました。

学長表彰者

クワテイ レオナルド
(生命物質システム専攻)
二〇一〇環太平洋国際化学会議(二〇一〇年十二月十五、十九日、米国ハワイ州ホノルル)においてStudent Poster Awardを受賞したことにより、学長表彰を受けました。

編集委員

(学年は平成23年3月現在)

数理情報科学科

教員 古澤 仁
二年 高山 紘志
四年 池島美奈子

物理科学科

教員 中川亜紀治
M二 坂井 伸行
M二 原田 勇治

生命化学科

教員(委員長) 濱田 季之
四年 北村 龍彦
M一 藤本 雅之

地球環境科学科

教員 市川 敏弘
四年 高藤 幸乃
四年 湯地 翔太

同窓会担当

教員 内海 俊樹

事務担当

総務係 徳田 琢

理学部通信発行協力金のお礼とお願い

第四号で「理学部通信発行協力金」をお願いしたところ、二百四十一名の方々から総額五十五万九千円(一月三十一日現在)のご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。お寄せいただいた協力金は、理学部通信発行など同窓会発展のために大切に使用させていただきますので、今後ともご協力の程よろしくお願い申し上げます。

理学部同窓会会長
理学部長

編集後記

第五号の理学部通信を発行するにあたり、ご協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。理学部同窓会では、隔年で同窓会総会を開催しております。次回(二〇二二年十一月)の総会に多くの方々のご参加を楽しみにしています。最後に、理学部通信が卒業生の方々、そして、卒業生と在学生との情報交換の場として今後とも発展していくことを期待します。

鹿児島大学理学部

〒890-0065 / 鹿児島県鹿児島市郡元1丁目21番35号
TEL : 099-285-8015,8025 / FAX : 099-285-8029
<http://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/>

鹿児島大学理学部同窓会

〒890-0065 / 鹿児島県鹿児島市郡元1丁目21番35号
TEL : 099-285-8937 FAX : 099-285-8946
<http://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/~dosokai/dosokai/index.htm>